

# 日本におけるサブカルチャーとその背景についての考察

## Consideration of subculture and its background in Japan

獨協大学院 博士前期課程 経済経営情報専攻1年  
崔 晨  
Cui Chen

### 1 研究課題の提起

筆者は当初、「日本の百貨店のSC化の可能性」をテーマに論文を執筆しようと意図して入学した。しかし、特にSC化が成功した事例と考えていた渋谷Parco等を考察する中で、その成功の立役者とも言える「裏原宿」ブランドの存在に注目するようになり、戦後の若者文化を彩った数々のユースサブカルチャーに筆者の関心は遷移していく。「もはや戦後ではない」と言われた1950年代半ばの太陽族から始まり、2000年代の裏原系に至るまで数多の「〇〇族」「〇〇系」と称せられるものが勃興した。「サブカルチャー」という言葉はしばしば耳にする言葉であるが、その定義や用例は必ずしも統一的ではなく、今回採り上げる若者文化にまつわる研究は少ない。また、先行研究の多くは、個別の若者文化にフォーカスするだけであり、あるいは各若者文化の繋がりなどを示すにとどまるものが多く、これらの若者文化に通底する部分と異なる部分、そして、そこに影響を与える歴史的背景などを包摂して捉える研究はあまり見られない。ここに筆者が本稿を執筆する意義があると考えた。

### 2 先行研究の検討

#### 2-1 サブカルチャー研究の起源と変転

「サブカルチャー」という言葉は、20世紀初頭のアメリカで社会学者によって用いられ始めたと言われる。当時急速な拡大を続ける大都市は様々な社会問題の坩堝と化しており、世界各国から押し寄せる移民たち、ストリートに屯する非行少年、娼婦、人足などがそれぞれの人種、宗教、階級、職業などで固有のコミュニティを組織していた。このような米国の状況に関心を持った社会学者たちの一群がシカ

ゴ学派と呼ばれ、「サブカルチャー」と言う言葉を生んでいく(Wirth, L. [1938]、Fischer, C. S. [1975]、Irwin, J. [1977])。

さらに、第2次世界大戦後のイギリスでも、パーミンガム大学現代文化研究所(The Centre for Contemporary Cultural Studies)を中心に特に若い労働者階級のコミュニティが切り出されて50年代のテッズ(Teds)、60年代のモッズ(Mods)、70年代のパンクス(Punks)などが議論されてきた(Hall, S. & Jefferson, T. [1976]、Hall, S. et.al. [1978])。しかし、米英の先行研究における関心領域は主としてストリートやコミュニティといった物理的空間、人種や宗教などであり、メディアの普及の問題をどのように組み込むか、特定の集団が非通念的であると判断する主体は何なのか(「〇〇はサブカルチャーである」と判断・規定されるにはどこがどのような過程を踏んで行のか)、世代間の闘争の問題など、議論が必要とされているながらも十分に意識できていない部分が積み残されている(難波 [2007])。

また、日本においては欧米と比較して人種、民族、宗教の問題が少ないことも手伝って、地域性や職業、被差別、ジェンダーなどがテーマとして掲げられてきた。特に青少年の非行問題は教育社会学などの側面から多くの研究実績がある。その一方で、サブカルチャーという用語の定義が十分になされぬまま独り歩きし、社会全体に流布していった。「オーセンティックな高級文化や広く一般大衆を対象とするマス・カルチャーとは一線を画した若者(ないし子ども)向けの作品・コンテンツ」と解されたり、「クラシック音楽や古典芸能、純文学などの正統文化以外のもの」といった下位文化のような理解をされたり、「オタク系コンテンツ≡サブカルチャー」かと

言われたり、はたまた「オタク vs サブカル」と考えられたりと、受け取り手によって様々な形で定義されている。特に共通して言えるのは何らかのコンテンツや作品と結びつけて語られることが多いということである。この点では前述のような欧米における先行研究との関連性はほぼ皆無と言ってよいだろう。

## 2-2 サブカルチャーの定義

このようなサブカルチャーの研究の起源とその後の変転を概観するにつれ、定義が錯綜している感は拭えない。そこで本稿ではまずサブカルチャーの定義について再考する。

Jenks, C. [2005]によると「カルチャー（文化）」の定義は「社会的なカテゴリーであって、人々の生活様式の全体（the whole way of life）を含意する」とある。この定義に立つならば、文化は何らかの作品を生み出す表現や創作といった営為や、それを批評・鑑賞する行いに限定せず、すべての実践を文化と見做し得る。また、諸文化の間に優劣や正邪の区別もない。このカルチャーの定義をサブカルチャーに敷衍して考察してみたい。

先行研究によれば、サブカルチャーの定義は下記の4種に大別できる。

1. 上位文化に対するサブカルチャー
2. 全体文化に対するサブカルチャー
3. 主流文化に対するサブカルチャー
4. 通念的文化に対するサブカルチャー

1の定義は、サブカルチャーの「サブ」は“下”という意味の接頭辞である（橋本 [1987]）という考えに由来し、正統ないし高級な文化とは並列に語り得ないとするものである。この定義に従うならば、「誰が何の権限によってその文化を上位／下位、正統／異端、高級／低級と判断するのか」という問題に必ず直面する。また、ごく一部のエリート層の間で広まった文化についてはサブカルチャーとは呼ばないことになる。

2の定義は、国民文化の一部分を成すのがサブカルチャーであるという考え方である（Gordon, M. [1964], Berger, P. L. et. al. [1972]）。この定義では1のような優劣の問題は解消される。しかし、全体文化とサブカルチャーの間に何らかの共通項が規定されなければならない。

3の定義はサブカルチャーがメインカルチャーとの対比で生まれるという考え方（小川 [1999]）である。この定義では時代の変化によってメインストリームやセンターに位置する文化が変化することも許容され、研究の視野に広がりが出る。しかし、常にメインカルチャーに対するアンチテーゼや抵抗として誕生することが規定されており、実際には「アンチとしての自覚」が当初からあることになる（難波 [2007]）。

4の定義に立つならば、3の定義で問題になったように、まず判然とした通念的文化があり、それへの対抗としてサブカルチャーが登場するというわけではない。サブカルチャーが社会で命名され、意識され、時には社会問題視され、像が明らかになると同時に、そのサブカルチャーを「サブ」たらしめている通念的文化も明示的になる。サブカルチャーの輪郭は通念的文化のリアクションによってのみ明らかになる（難波 [2007]）。筆者も4の定義に立つて論を進めたい。

## 3 今後の研究について

戦後の日本社会において、イギリスのユースサブカルチャーズに対応するような存在は、「〇〇族」と呼ばれた若者諸集団であろう。馬淵 [1989]、千村 [1996]、成実 [2000]、日高 [2006] など様々な研究がなされているが、サブカルチャーがどのような社会的背景のもとで誕生し、つながりがあるのか、さらに踏み込んだ研究をする必要があると筆者は考える。

本稿ではまず、太陽族、みゆき族、フーテン族、アンノン族、暴走族、クリスタル族、渋谷系、コギャル、裏原系など、戦後の主だった族や系の生成と態様、消息、周囲との関係性などを概観する。さらに、各族や系に共通する事項や変化している部分などを抽出し、それが日本の戦後のどのような諸現象と深く結びついているのか、教育、企業、労働観、家族、地域社会など様々な角度から各種文献をもとに考察し解き明かしていきたい。

## 《参考文献》

アクロス編集室編『ストリートファッション1945-1995』  
PARCO 出版 1995年

- 有吉秀樹『マーケティングの新視角～顧客起点の戦略フレームワーク構築に向けて』創成社2014年
- 有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』中央経済社 2007年
- 有吉秀樹『コーポレート・ブランド価値計測モデルの提唱』白桃書房 2008年
- 石津謙介『石津謙介 いつもゼロからの出発だった』日本図書センター 2010年
- 市川孝一「街族を再検証する～六本木族、みゆき族、原宿族」『明治大学文学部紀要』122号 2014年2月 pp. 1～18.
- NHK 放送世論調査所編『図説戦後世論史第二版』日本放送出版協会 1982年
- 小川博司「現代日本のサブカルチャーとは何か～支配的価値観のゆらぎの中で」『月刊民放』29巻9号 1999年9月 pp. 4～9
- くろすとしゆき『アイビの時代』河出書房新社 2001年
- 千村典生『時代の気分を読む：ヤングファッションの50年』グリーンアロー出版社 1996年
- 成実弘至「日本サブカルチャー試論」『ウォーク』36号 2000年
- 難波功士『族の系譜学～ユースサブカルチャーズの戦後史』青弓社 2007年
- 難波功士「ユースサブカルチャー研究における状況的パースペクティブ」『関西学院大学社会学部紀要』95号 2003年10月 pp. 107～121.
- 橋本治「サブカルチャーの不思議」『思想の科学』1987年4月号
- 東浩紀『動物化するポストモダン～オタクから見た日本社会』講談社 2001年
- 日高恒太郎「『族』にみる戦後六十年」『(別冊歴史読本 29) 戦後社会風俗史データファイル』新人物往来社 2006年
- マガジンハウス書籍編集部編『平凡パンチの時代～失われた60年代を求めて』マガジンハウス 1996年
- 馬淵公介『「族」たちの戦後史』三省堂 1989年
- 宮台真司他『サブカルチャー解体神話』パルコ出版 1993年
- Buruma, I., *A Japanese Mirror, Heroes and Villains of Japanese Culture*, Random House UK, 1984. (山本喜久男訳『日本のサブカルチャー～大衆文化のヒーロー像』TBS ブリタニカ 1986年)
- Fischer, C. S., Toward a Subcultural Theory of Urbanism, *American Journal of Sociology*, Vol.80, No.6, 1995, pp.1319–1341.
- Gordon, M., *Assimilation in American Life : The Role of Race, Religion and National Origin*, Oxford University Press, 1964. (倉田和四生 山本剛郎編訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相～人種・宗教および出身国の役割』晃洋書房 2000年)
- Hall, S. & Jefferson, T., *Resistance through Rituals*, Harper Collins, 1976.
- Hall, S. et.al., *Policing the Crisis*, Macmillan, 1978.
- Irwin, J., *Scenes (City & Society)*, Sage Publications, 1977.
- Jenks, C., *Subculture : The fragmentation of the Social*, Sage Publication, 2005
- Wirth, L., Urbanism as a Way of Life *American Journal of Sociology*, No.4, 1938, pp.1–24.
- Berger, P. L. et. al., *Sociology*, Basisboeken, 1972. (安江孝司他訳『バーガー社会学』学習研究社 1979年)